

## 留萌の地層

留萌川周辺の地層は、ほとんどが太古に海の底だったところに積もった土砂が半分固まったものである。そのため、雨が降るたびに削られ、再び土砂に戻って留萌川を汚す。このため、留萌川の水はいつも濁ったままで流れていくことになる。このような地層の中を流れている留萌川を清流にすることは不可能といってもよい。しかし、この地層は北海道の生いたちを考える上では重要な鍵を握っているのである。

留萌の地層で一番古い地層は樺戸山地を作っている地層の仲間である。留萌の中で一番固い岩石でできており、隈根尻層（くまねしりそう）と呼ばれている。約一億三千万年前の前期白亜紀にこの地層ができたと考えられ、



大和田炭鉱の石炭

その時留萌は大陸と陸続きであったと考えられている。この層は黒色硬質頁岩と安山岩からなり、留萌川の南側に局所的に分布しており、放産虫の化石が産出している。今から、五千万年前新生代始新生になると二つの陸の塊が北海道中央部でぶつかりはじめ、海の底であった北海道中央部がだんだん隆起し、現在の日高山脈を作った。そして、

## 福士広志

館長  
ふるさと係  
海の芸学

ふくし・ひろし  
昭和26年生まれ。43才。  
同58年より留萌市役所  
入庁。同60年より本稿  
執筆

日高山脈と大陸の間には南北の細長い低地が出来た。そこには多くの木々が生い茂った。この木々が倒れ、低いところに集まって、陸の衝突の圧力を受け、石炭になっていった。北海道の石炭はほとんどがこの時期にできたものである。

留萌でもこの時できた大和田層があり、この中には三、四枚の石炭を含む層がある。この石炭層は明治二十年代に発見され、三十年代から採掘が行われた。大和田炭鉱がこれで、この石炭は火力が強く、コークスとして草創期の岩手県釜石に送られ、製鉄に使われた。この大和田炭鉱も昭和三十年代に閉山し、現在では大和田層からの石炭の採掘は行われていない。

また、この層からは植物の化石、淡水にすむ動物の化石、タニシ、シジミ、カワシジメガイ（カラスガイ）、海にすむ有孔虫の化石も発見されており、海になったり、陸に成ったり、低湿地になったりとめまぐるしく変化した時代でもあった。